
不思議な少女と僕と

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不思議な少女と僕と

【Nコード】

N5703P

【作者名】

雲天道風

【あらすじ】

ある日悠慈は暗い洞窟へと足を踏み入れた。

そこは出ると二度と出れないという危険な場所。

だが・・・

そんな所に可愛い少女がいた。

悠慈はその少女を気に入り、その洞窟へ毎日通うようになった。

そして、その少女の謎ぶりに、悠慈は不思議に思い、少女のことを調べようと思った。同時に悠慈は少女に好意を抱いた。

調べていると少女を知っている老人にでくわし・・・

人里から離れた山の近く。

そこには暗くて何も見えない洞窟がある。

誰もがそこには近づこうとはしない。

そこに入っては、誰も出ることができないのだから・・・

そんなところには、生物が住むことは出来ない。

だけど、そんなところにも・・・

それは、そこにいる謎の少女の話し。

その少女は自分は何処から来たのかわからない。

気づけばこの真っ暗で冷たい所にいた。

そこには何もなくて、辺りは静かで、自分が闇に飲まれてるような気分になる。

ここに来てしまった人は、皆闇に飲まれていく。

何もない。

何も聞こえない。

何も見えない！

初めての・・・

パシャツ

パシャツ

この地面には水が浸されている。

その水を蹴る音が少女の耳に入ってくる。

小さな、小さな光。

弱々しい光が近づいてくる。

そんなちつぽけな光でも、少女にとっては眩しすぎるほどだ。

少女は光を知らないのだから・・・

『・・・』

少女は光を見つけ、目を細めた。

初めてみる光。

少女は目を細めながらも、好奇心に満ち溢れ、目を離せないでいた。

『そこにいるのは誰？』

少し可愛い声だが、男の子の声であろう声に、少女は耳を傾けた。

少女にとっては初めて聞く音？言葉？

少女は言葉も知らない。

その子はほんと、少女へと距離をつめてくる。

その子の手には懐中電灯があり、光はそれによるものだった。

懐中電灯を片手に、その子は怖がることなく、悠々とした足取りで少女へと近づいた。

少女は始めてみた。

人を、ものを・・・

真っ暗な世界が少し色づいて、少女は自然と笑みが零れた。

『女の子？どうしてここにいるの？迷ったの？僕と一緒に町までいこうか？』

その子は必死に少女に話しかけるが、少女は返事をする事が出来ない。

言葉の意味がわからないのだから・・・

『どうかした？もしかして、僕の言葉がわからないとか？』

その子は懸命に少女に話しかけた。

だが少女は言葉に興味を示すも、何を言ってるかは理解できない。
だから何も答え返せない・・・

『じゃあ・・・いこ』

その子は、少女が言葉を理解できないことを理解すると、手っ取り早いと思い、手を差し伸べた。

少女は一瞬躊躇するも、その手に触れた。

少女が触れると、その子はその手を握った。

『あっ・・・』

少女の体に一瞬何かが走った。

寒気のような、なんとも言えない感じが・・・

自分が、自分以外の何かに触れることも、これが始めて。
初めての感覚に、少女は戸惑う。

『ごめん・・・大丈夫？』

その子は少女の異変に気づき、手を離れた。

理解できないとわかっていても、少女を心配する。

『あっ、う・・・』

少女は恐る恐る手に触れた。

初めての感覚に戸惑ったけど、少女にとってそれは、嫌なものはなかった。

『いこっ』

その子は少女の行為を、了承と受け取り、手をとって歩き始めた。

洞窟はそれほど深くはなく、少し歩いただけで光が見えてきた。

少しの太陽の光にも、少女は目を伏せる。

その子は、少女は目がなれないのだろう。と、あまり気には留めなかった。

もう少し歩くと、完璧に太陽が顔を出した。

そう、出口に到着したのだ。

『やっと出れたね』

その子は少女に向かって微笑む。

だが、しかし。

少女は……

『うっ、ああああ』

いきなり叫びだし、光を当てまいと、目を手で覆い隠す。

その少女のおかしすぎる異変に、さすがに戸惑う。

目を隠していることから、光が原因なのは、その子にも理解できた。

『大丈夫？走るよ』

言葉を理解できない相手。

そんなことは理解している。

だけでもその子は、少女に一回一回優しく言葉を投げかける。

その子は少女を連れて、光が入らない所まで戻った。

そこまで来ると、少女はゆっくりと瞼を開け、闇だということを認識すると、その子に何かを訴えようと、懸命に努力した。

少女は言葉を使えない。

少女は言葉をわからない。

ならば、どうやったら伝わるのか？

どうすれば、自分の思いを伝えられるのか？

少女は必死に考えた。

『うっ、う……』

少女はその子の袖を引っ張りながら、ジェスチャーをしようと考えた。
懸命に手を動かす。

最初は目を隠すポーズ。その次はこの洞窟を指差し、自分を指し、座り込む。

少女はこう伝えたいのだ。 自分は光には弱いようだ。 自分はここにずっといたのだから。

と・・・

その少女の行動を、理解できたのだろうか？

『眩しいの、ダメなの？ここが・・・いいの？』

その子はだいたいは解釈できたようだ。

『そうなんだ。でも・・・どうやってここで生活してるんだろう？』
言葉を理解できない相手に問いかけても、答えが返ってこないと思っ
てなのか。その子は、自分に問いかけるように喋った。

『そんなこと、わからないな・・・』

結局答えは出なかった・・・

ならばどうすればいいのか？

外に出せば、町に連れて行けば、この少女のことを知っているもの
がいるはず・・・

そう思っただけ、この子は光に弱いらしい。

『ここにずっといたのかな？どれくらい？』

その子はまた、自分の疑問を、あえて声に出して言った。
少女にたくさん言葉を聞かせるために・・・

それからその子は少女と一緒に洞窟に座りながら、この子をどう
しよう？と、考えていた。

だけど、答えは出ず、暗闇が近づいてきた。

この山から町に帰るには、暗いとかかなり危険だ。

だいたいこの洞窟自体が危険な場所だ。

長くいるわけにはいかない。

だけど、この少女を放っておくことも、出来ない。

『一緒に行ってみる？もう太陽は隠れ始めているし、さっきよりか

は眩しくないよ』

そう言ってその子は少女に手を差し伸べた。

言葉を理解できない。言葉を喋れない少女には、行動で答えを出してもらうしかない。

だから自分も行動で示す。

だけど・・・

少女は手を差し伸べようとはせず、首を横に振った。

さっきも同じことをしたからか、少女はその行動を理解したようだ。

『そつか。じゃあまた明日来るね。今度は何か食べ物でも用意するよ』

その子は笑顔で少女に手を振り、洞窟の外へと走っていった。

その子の姿が暗闇に消えると、少女は少し嫌な気分になった。

何故なのか？少女はそれを理解できない。

少女は感情も知らないのだから・・・

だけど、感情がないわけではなく。

ただ、それが？寂しい？という感情だということを知らないだけ。

疑問

その子は少女のことをとても不審に思っていた。

あんなところに生物は住めない。

あんなところにいられるはずはない。

光があんなにもダメなのは、ここに長くいる証拠。

あの少女は何者なのか？

その子はあの洞窟から帰ってから、少女のことばかり考えていた。

考えれば考えるほど疑問は増えるばかり。

どんだん、少女が得体の知れない者ではないのか？という方向に思考が回っていく。

だけでも、その子は少女に恐怖を感じることはなかった。

あんなにも可愛い少女が、自分達と見た目の変わらないただの女の子が、例え得体の知れない化け物だとしても、あの少女が何かをしってくるようには見えない。

だからその子は少女にこれから也会いに行こう。そう思った。

毎日通えば、何かがわかるかもしれない。

少女のことについてなにか、わかるかもしれない。

寂しい

少女は眠っていた。

あの子がいなくなってから、十五時間が経過した。

少女は目を覚ました。

あの子がいなくなった時に感じたものは、今も消えることがない。

少女は胸がもやもやした。

胸の中にぽっかりと何かが消えたようだ。

『ダイ、ジョウブ・・・』

少女はあの子が言っていた言葉？大丈夫？という言葉を呟いた。

少女は微笑んだ。

言葉の意味が理解できたのだろうか？

いや、出来てはいないだろう。

少女はあの子が言ったときに感じた。？安心？という気持ちになり、その時の言葉を覚えていた。言葉の意味は知らなくても、少女

にはきちんと届いていた。

その子の優しい、自分を労わる気持ちを・・・
だけど、少女は寂しかった。

今まで少女は人間に会ったことがなかったから。人間の温かみと
いうものを知らなかった。

そんな少女が、人間の温かみを知ってしまった今。

その温かみがなくては、寂しい気持ちになってしまうのだ。

『ダイジョウブ』

少女はもう一度あの言葉を呟いた。

この言葉を聞くと、元気になれる気がしたから。

四時間後。

洞窟に小さな足音が聞こえた。

昨日も聞いた音。

少女はその音に？嬉しい？という気持ちになった。

寂しかった。会いたかった。少女はそう感じていた。

もっとも、少女がその感情を理解することは出来なかったが・・・

どんどんと大きくなる足音。

それはあの子が近づいてきていることを示す音。

少女は嬉しくて、どうしようもない気持ちになった。

この気持ちは何？

少女はそう感じていただろう・・・

『待つててくれたの？ほら、パンを持ってきたよ。ここにいちや、
お腹すくでしょ？』

言葉を理解できない相手に、優しい言葉を投げかける。

この子のこの努力のおかげで、少女は言葉に含まれる感情を理解
してきているんだ。

その子はそう言ってビニール袋に入った一枚の食パンを少女の前
に出す。

少女は？食パン？というものに興味を示した。

これは何をするものなのだろうか？

この臭いはなんだろう？いい香りがする。

食パンに対する感想や疑問がでてくる。

『食べたことないのかな？これはね、こうやって食べるものなんだよ』

そう言いながら、その子は食パンを千切って口に入れた。

少女はその行為を眺めながら、食パンに手を伸ばす。

『どうぞ。美味しいよ』

少女は食パンを先ほどのように千切ると、口に入れた。

少女は初めて口に物を入れた。

少女はその時初めて？味？というものを知った。

『オイシイ？』

口の中に広がるふわふわした感触。

口の中に広がる食パンの味。

少女はその子の言葉を真似してみた。

『うん。美味しいでしょ』

その子は少女が言葉を口にしたことが嬉しかった。

自分の言葉を意味もなく真似ただけかもしれないけど、それでも少女が言葉を口にした。その事実がとても嬉しかった。

『今度はもっと美味しい物を持つてくるからね』

『モットオイシイ？』

『そう、もっと美味しい物だよ』

少女が言葉を口にする度に、その子は喜んだ。

『僕の名前ね。悠慈って言うんだ。ゆ・う・じ』

悠慈は少女に名前を覚えさせようと、ゆっくりと言った。

少女は最初は首を傾げるだけだった。

少女にとって言葉を覚える。ということは、とても困難なことなのだ。

悠慈は何度も何度も自分を指差しながら名前を連呼した。

しかし、少女は中々名前を口にしてはくれない。

悠慈は少し悲しかった。

だけど、仕方がない。とも思った。

言葉を覚えることも難しい少女が、名前を覚えるなんて、とても難しいことだろう。

でも、悠慈は諦めたわけではなかった。

いつか少女が笑顔で『悠慈』と、自分の名前を呼んでもらえたら、と、悠慈はその時のことを想像していた。

次に、悠慈は少女の名前を決めようと思った。

自分の名前は言っではもらえなかったけど、自分に言われてると思えば少女だつて覚えられるのかもしれない。

それにもし少女に名前があつたとしても、今の少女には聞き出すことは出来ない。

それならば、と考えた。

『君の名前は、結城。ゆ・う・き』

今度は少女のことを指差しながら、名前を呼ぶ。

最初はまた少女は首を傾げるだけだった。

だが、悠慈が何度も何度も少女を指差しながら名前を連呼すると、

・

『ユウキ？』

少女はようやく名前を口にした。

『そう、君の名前は結城だよ』

『ユウキ』

今度は笑顔で結城は名前を口にした。

やっぱり自分に言われていることは、なんとなくわかるのだろう。

悠慈は笑顔になった。

昨日まで何も喋れなかった結城が、美味しい。や、結城。と、悠慈の教えた言葉を喋れるようになったからだ。

言葉を教えるのは、もっと難しいことだと思っていた。
だけど、意味を理解しているかはおいといて、結城は経った二日
で、いや、経った数分で一つではあるが、言葉を覚えた。
それは悠慈としてはとっても嬉しい事実だ。

結城は結城で、悠慈に言葉を教えてもらうことが嬉しいと思っ
ていた。

同時に、もっと覚えたい。とも思った。

結城の場合は、感情を覚えたほうがいいのかもわからないが。

まあ、それはひとまずおいておこう・・・

孤独

結城はそれからたくさんの言葉を覚えた。

毎日通つては、優しく言葉を投げかける悠慈のおかげで、今では
意味も段々と理解してきている。

『・・・アイタイ』

悠慈が帰ると、結城はいつも寂しさを感じる。

マダ感情は理解出来ていないけれど、それが嫌なものだといふこ
とは結城も理解していた。

？寂しい？この感情はマダ言葉すらも知らない。

結城は言葉を覚えながらも、もっと知りたい。と思うようになって
た。

今や結城にとって言葉を覚えるということは、悠慈との大切な一
時をよりいっそ楽しめるものになっていた。

結城にとつてとても嬉しいこと。

それに、言葉を知れば知るほど、悠慈のことを深く知れる。

もつと知りたい。というのは、悠慈のことを知りたい。という意味でもあった・・・

悠慈を待つ時間は、結城にとっては？退屈？でしかなかった。今まで人と接したことがなかったのに、人とのふれあいの温かさを感じてしまつては、一人が？孤独？だと感じる。

結城の中で、色々な感情が渦巻いた。

どれも嫌な感情だ。

だけど、それがどんな感情なのかは、マダ理解出来ない・・・？孤独？

この感情は、理解しないほうがいいのかもしれないけれど・・・

調査

悠慈は結城のことが知りたくて、町の様々な人に聞いてみた。だけど、中々結城を知る者はいなかった。

まず、あそこに人が住めている。

その事実すらも信じてもらえないでいたのだから、結城の話を聞くことなど出来なかった。

『何で皆知らないんだろう』

悠慈は困り果てていた。

町にはこんなにも人がいるのに、結城のことを誰も知らない。どうして？

悠慈の中には疑問と不安が募っていく。

『もう少し』

だけど悠慈は諦めることをしなかった。

マダ町には人がいる。

諦めるのはマダ早い。

自分にそう言い聞かせながら、悠慈は町にいる人と言う人に聞いて周って行った・・・

好きな感情嫌な感情

結城はずっと待ち続けていた。

いつもならもうとつくに来てるはずなのに、結城は？不安？という気持ちになった。

？不安？

結城が始めて感じた感情。

これも嫌な感情。

それだけは結城にも理解することが出来た。

『ダイジョウブ』

結城が最初に覚えた言葉。

結城は少し？安心？したような気がした。

？安心？

これは結城が初めて感じた感情。

この感情を結城は気に入っていた。

だから？大丈夫？同時にこの言葉も気に入っていた。

・ 結城が感情を理解するのも、そう遠くない未来なのかもしれない・・・

疑問と不安

悠慈は調査を続けていた。

辺りはすでに薄暗くなっていて、人も少なくなってきた。
それでも悠慈は調査を止めず、色々な人に聞きまわっていた。

悠慈はある一件の家にたどり着いた。

先ほど聞いた人からは、直接な情報は聞けなかったが、ここに住んでいるというある老人に聞けば、わかるかもしれない。
そう言われ、悠慈はここに来たのだ。

『ここに聞けば・・・』

少し古ぼけた建物。

ここが昔から建っていることを示している。
だけど今は、そんな光景に怯えている場合ではない。

悠慈は勇気を振り絞り、呼び鈴を鳴らした。

呼び鈴の音がなると、扉が自動で開いた。

『どんな金持ちなんだよ・・・』

悠慈はそう言いながらも、恐る恐る一歩、この家の敷地に入った。

敷地の中に入ると、周りには木々が生えていて、暗く見え、余計に不気味に見えた。

悠慈は覚悟を決め、その中を進んでいくと、部屋が見えた。
部屋の前まで歩いていくと、人影が見えた。

例の老人ではないだろうか？悠慈はそう思って声をかけた。

『あの、すみません。少しお尋ねしたいことがあります』

悠慈が話しかけると、老人はこちらへと歩み寄って来た。

『ほう、わざわざここまで』

近づいて来たことでやつと悠慈の目に姿が映った。

その老人はこの家に似合わないほどの綺麗な服を着ていて、どこかの貴族のような人だった。

『それで、何が知りたいんじゃない？』

想像していたとは全く正反対の姿に、つい見入ってしまったしていると、相手の方から話を振ってきた。

『あつ、人のことについて知りたいんですけど・・・』

『ほう、人を、ね・・・』

その老人は何処か含みのあるような言い方をした。

まるで今から悠慈の話すことがわかつていくかのように・・・

『どうしてわしの所に来たのじゃ』

その老人は悠慈の話を聞くより先に、自分の疑問をぶつけてきた。

『貴方なら知っていると聞いたからです・・・』

悠慈は何だかその人には何もかもを見透かされてるような感じがした。

なんだろうこの人は、どうしてこういう風に思うのだろうか？

見た目はただの老人にしか見えないのに・・・

自分にはそんなことを感じる能力なんてないのに・・・

不思議だ。

何だかこの人はとても不思議な感じがする。

普通の人じゃない。

なんとなくそう感じた・・・

話を聞けるのはこの人しかいないけど、悠慈はこの人から今話を聞けるかどうか、とても不安でいた。

きっとまともにこの人の言葉なんて耳に入らないだろう。

悠慈は直感的にそう思った。

だから・・・

『やっぱり今日は帰らせてもらいます。日も暮れてきましたし』

そう言って、踵を返そうとした悠慈に・・・

『会いに行くのかい？忠告をしておくぞ・・・』

悠慈は古ぼけた建物を後にして、フラフラとした足取りで歩いていった。

最後に言われた言葉がどうしても耳から離れない。

意味深な言い方をされては、嘘だろう。と、笑い飛ばすことが出来ない。

あの人の言葉は何だかとても胸に染み込む。

一度言われては忘れられない。

とても印象に残る言葉だ・・・

『あの少女は危険なものだ。感情や言葉などを覚えさせれば、どうなるかわからんぞ』

あれは、一体、どういう・・・意味なんだ？

確かに結城が不思議な存在なのは知っている。

だけど、危険って・・・

見た目も何もかも、普通の人間と変わらないのに・・・

なら何故あの子は何もないところで生きられる？

悠慈の中で？普通？を覆す疑問が浮かんでくる。

何故あの子は光に弱い？

次々と悠慈の中で、結城が化け物だと思わせる疑問が出てくる。

『そんなはずはない。それにもし、結城が化け物でも・・・』

もし結城が化け物なら、危険な物体なら、自分はどうする？

今までみたいに会いに行ける？

今までみたいに笑いかけられる？

結城を怖がらずにいられる？

悠慈の中に次々と不安にさせる疑問が出て来た。

その疑問には、何一つ答えられない。

今の悠慈には・・・

感情

結城は悠慈のことを待っていた。

いつもならもうとくに来てる時間なのに・・・

時計などはないけれど、結城にはなんとなくわかる。らしい・・・

結城はずっと待っていた。

結城はずっと不安でいた。

悠慈がいない時は、いつも結城は不安だ。

そして、？寂しい？

結城にとって悠慈は、初めての誰かとの繋がり。

今まで一人だったので、尚更一人になると？寂しい？

昔とは違う。

人とのふれあいの楽しさを知ってしまったから・・・

そんな結城は、今や一人では生きていけない。

一人は？寂しい？

そう感じるようになってしまったから・・・

？寂しい？

それはとても？悲しい？こと。

？悲しい？

それはとても嫌なこと。

結城は段々と感情を理解してきたのかもしれない・・・

だけど、結城の覚えた感情は、どれも嫌なものばかり。

結城にとって感情はなんなのだろうか？

嫌な感情ばかり・・・

そんなもの、結城は覚えていいのだろうか？

それならば、感情を知らないほうがいいのではないだろうか？
だけでも、結城は感情を理解しようとしていた・・・
嫌な感情を知っても、尚感情を理解しようとしているんだ・・・
理解しなくてもいいものを・・・
彼女は・・・

後悔

しまった。

家に帰って悠慈は反省した。

大切なことを忘れていたからだ。

つい調査に夢中になってしまい、結城に会いに行くことを忘れてしまった。

今まで一日も休まずに行ってたのに・・・

結城はどうしてるだろうか？

悠慈の中に後悔と、罪悪感が込み上げてきた。

だけでももう日は暮れている。

今から会いに行くことなんて出来ない。

仕方がない・・・

だけどそうは思えなかった。

今すぐにでも会いに行きたい。

さっき結城に感じたことなど、悠慈はとくに忘れていた。

というより、もう頭の何処にも、そんな考えはなくなっていた。

？会いたい？。

その気持ちだけが、悠慈の心を支配していた。

限界

結城は眠っていなかった。

ただじっと、洞窟の入り口を見つめていた。

悠慈が来るのをずっと、ただじっと、待ち続けていたのだ・・・
？寂しい？

感情はわかっていなくても、今結城の中にはこの感情だけが支配していた。

他の感情は何もない。

だけど、そのたった一つの感情だけでも、結城を？不安？にさせるのには充分すぎるほどだった。

？不安？

結城の心の中は？寂しい？という感情に押しつぶされ、今にも張り裂けそうだった。

結城は今までにないぐらいの嫌な気持ちになっていた。

とても嫌で、嫌で、嫌で・・・

『うああああ』

結城は嫌で嫌でたまらなくて、我慢しきれずに叫んでしまった。

その声の音量は計り知れないもの大きなもので・・・

大きな音を立てて、洞窟の奥のほうの壁が崩れ落ちていった。

このままではこの洞窟が崩れ落ちてしまうのではないか？

そうなってしまつてはかなり危険だ。

洞窟が崩れれば、中にいる結城も巻き添えをくらってしまう。それに、もし助かったとしても、結城はこの洞窟の中でしか生きられないのだから・・・

『結城！』

悠慈は近くまで来ていたのだ。

結城の声を聞きつけて悠慈は急いで駆けつけてきた。

『結城！』

もう一度大きな声で結城に呼びかけた。

『ああ・・・』

結城の耳によく悠慈の言葉が入った。

悠慈の声を聞くと、結城はようやく落ち着いた。

『大丈夫だよ結城。どうしたの？』

まさか自分が会いに行かなかったからこうなった。

そんな風には思っわけはなく。悠慈はまだ言葉を覚えてたての結城に懸命に問いかけた。

『アイタ、カッタ』

結城の言葉で悠慈は固まってしまった。

まさか、まさか自分が会いにこなかったせいでこれほどまでになるとは・・・

自分の責任や、結城への驚きや、色々なことに驚いて・・・

『ごめんね結城。悪かった。ここににいるから、ちゃんとここにいますから』

結城は全ての言葉を理解できたのだろうか？悠慈はそんなことを考えたけど、今はそんなことどうでもよかった。

言葉の意味が伝わっていなくても、結城に？安心？を与えられれば、ただそれだけでよかった。ただ伝えられれば、それだけで・・・
『イツシヨ』

結城はそう言って嬉しそうに微笑んだ。

それだけで悠慈は嬉しかった。結城が喜んでくれたから、自分の言葉で笑顔になってくれたから。それが凄く嬉しかった。

結城の言葉は悠慈に対する気持ちが多い。

会いたい。とか、一緒。とか・・・

結城はきつと悠慈に伝えたい言葉を覚えて言ってるのだろう。

感情は暗いものでも、言葉は明るく、安心できるものを覚えてい

た。

『ずっと一緒だね。結城・・・これからずっと一緒だよ』

決心

結城が危険なもの。という考えは、強くなった。

だけど、今日のことから結城から離れたくない。って思うようになった。結城から離れるなんて・・・例え危険で、化け物だとしても、絶対にできない。絶対に、もう自分は結城からは離れられない。悠慈はそう思った。

あの疑問の答えの確信が、今持てた。

悠慈はもう結城から、あの不思議な少女からは離れられない。離れたくないのだと。

もうその気持ちは絶対に揺るがない。

誰に何を言われようと・・・

悠慈は考えた。そうだ。自分の気持ちが揺るがないのなら、あの人もう一度結城のことを聞いてみよう。

もう何を言われても大丈夫なのだから・・・

『また来たのか』

『はい』

相変わらず古ぼけた建物に似合わない豪華な服を着ている。とても不思議な老人だ。

この人は何でもわかっていそうだ。何でも見透かしていそう。な

ら、今の悠慈の決心もわかるのだろうか？

『今度こそきちんと話を聞きに来ました』

『忠告をしたはずだが、貴様はまだ会いに行ってるのだな』

どうしてこの人はそんなところまでわかるのだろうか？

そこがとても聞きたいけれど、だけど今は話を逸らしてはいけない。

悠慈はでかかった疑問を飲み込んだ。

『はい。自分なりに決心をしましたから』

悠慈は誰に何を言われようと、もう気持ちは揺るがないと考えていた。

だからこの人の言葉だって、忠告だって、耳になんていれない。悠慈はそこまで決心していた。

『ほう。迷いはないと？』

『はい・・・』

何だろうこの人は・・・

決心をしたが、この気持ちはけっして揺るがないと考えているが、この人に言われると、なんだか自信をなくしてくる・・・悠慈はだんだん不安になってしまった。

どうしてだろうか？と悠慈は思った。

『何が知りたい』

その老人に迷いを見抜かれた気がしたけど、その人は気にせずに質問を聞いてきた。

何を考えているのだろうか？悠慈の心は読まれているのに・・・

悠慈からはこの人の考えがわからない。

悠慈にとってなんて不公平な状況だろうか。

『ある一人の少女のことについて聞きたいのです。あの言い分ではもうご存知ですよね？』

その人は返事も、首も動かさなかったけど、それが肯定だとり、話を進めた。

『あの少女・・・結城は一体何なのですか？』

悠慈が質問をし終えても、その人は微動だにしなかった。
答えを思い出しているのだろうか？

それとも答えがわからずに答えを考えているのだろうか？

この人の考えはわからない。

誰しも人は、少しでも反応を示してくれる。

それによつて多少だけれども、何を思っているのか状況から判断
することができる。

だけでも・・・この人は全くその反応を示さない。

『何者・・・貴様は何者だと思ったのじゃ？』

質問返し・・・

自分は結城のことをどう思ったのか・・・

それは少し、いや、正直言つとかなりおかしいとは思つた。

まず、あの洞窟で生活できていることにも驚いたが、なんと
言つても光を嫌う。あれほど過激な反応ならば、もしかしたら光を知ら
ないのじゃないのか？なんて思つたりもしていた・・・

まあ、結論から言つたら普通の人間じゃない。悠慈はそう思つた
のだ。

『それは・・・普通では、ないかな？とは、思いました、けど・・・』

『

ほう』

そう答えた時、その人は笑みを作つた。

何かおかしいことを言つてしまっただろうか？悠慈は不思議だな
と思つた・・・

『ならば貴様は何故そんなモノと一緒にいるのじゃ？』

『何故？』

どうしてだ？

悠慈はどうして結城と一緒にいたいと思つたのか・・・

悠慈は記憶の中からそれを思い出そうとした。

悠慈は思い出した。

自分は結城が得体の知れないものでも、それでも彼女が危害を加

えるようには思えなかったからだ。

そうか。そんな気持ちだったのか・・・

なのに、いつの間にか自分は結城がいけないといけない風になっていた。・・・悠慈は自分

で今始めて知ったような気がした。

『ただ、なんとなくだったんです・・・だけど、いつの間にか・・・って感じで』

『ただなんとなく。あんなモノと付き合おうと思ったのか？』

悠慈の思いを知っててわざと言ってるのだろうか？

それならばどうしてこんな質問をするのだろうか？

ただ悠慈に気持ちを気づかせるため？それとも他に何か・・・

『なんとなく、どうして僕は・・・』

悠慈は自分の気持ちがわからないでいた。

どうしてだろうか？どうして自分はただなんとなくであんな得体の知れない存在と・・・例え危険はなさそうとはいえ、そんなものただの自分の考えにしか過ぎないだろうに・・・どうして？

悠慈はその疑問に立ち止まってしまった。

何を言われても揺るがないはずだったのに、こんなことで、ただこんな質問で・・・というよりは、自分はそんなにも考えなしに会っていた。

別に人に会うのに理由など、そしてどうして会っているのかなどというのはいらない。だけど、彼女は違う・・・

彼女は普通の人間じゃないから。

だから何にも理由があるんだろう・・・

だけど悠慈はそんなことなんて何も考えていなかった。

悠慈はきつと結城のことを人間のように思っているからだろう。

悠慈はそれに気づくのだろうか？

きつと悠慈は会ったときから結城にそう思っていて、自分がそう思ってるということには気づいていないのだろう。

だけでも、これをあの人は、見破っているのだろうか？

『次に問おう。お前はあのモノをどう思っておる？』

自分は結城のことをどう思っているか・・・

『好きです』

悠慈は迷いなく答えた。

自分は結城が好きだ。だから会いに行っている？

悠慈はだんだんと理由を理解始めている。

『ほう。では問おう。あのモノの第一印象はなんだったのじゃ？』

その人は悠慈に遠まわしに答えを導こうとしていた。

この老人はきつと悠慈に自分で答えを知ってほしくて、わざとこ
うした質問をしているのだろう。

悠慈はこれに気づくのだろうか？気づくことはないだろう・・・
だが、その答えぐらいは出してもらわねばならない。その答えは・
・きつと出すだろう。

『第一印象？』

悠慈は老人の問いを聞き返した。

どうしてそんなことを聞くのだろうか？

悠慈は気づき始めてきたのだろうか？

『可愛い女の子・・・かな？』

やはり悠慈は気づいていなかった。

まあ、それも無理はないだろう。この老人はあえて相手に気づか
れないようにしているのだから・・・

『そうか』

老人は悠慈の方を見てほくそ笑んだ。

まるで自分の思い通りに動いている。とても言うように・・・

『それで、結局貴方は何が聞きたいんですか？質問には答えてもら
えないのですか？』

老人の笑みは一瞬で顔から消え、悠慈を探るような目で見つめた。
『さすがじゃな。これを聞いて、お前が後悔すると言ったら？』

後悔・・・

悠慈はこのことで後悔するのだろうか？
結城の真実を知ってしまったら、後悔するのだろうか？
そんな疑問が浮かんだ。答えは・・・

約束

悠慈はまた帰ってしまった。

結城にあんなにぬくもりを残して、悠慈は帰ってしまった・・・
？また明日？

悠慈はいつも帰る前には必ずこの言葉を言って帰る。

そのおかげで結城はその言葉を覚えた。

？また明日？

それはまた会えるという約束。そして、安心を与えていく言葉。
また会えるという約束は、一緒にいることを約束している。

結城にとって悠慈との明日の約束は、とても楽しみで、とても安心して、とにかく結城にとって凄く嬉しい約束。

『マタアシタ』

結城はその言葉を口にする、嬉しそうに微笑んだ。

最近結城は笑うことは楽しいことと認識した。だから結城はよく笑うようになった。笑っていれば楽しいから、笑っていれば悠慈が会いに来てくれるから。

悠慈は結城の笑顔がとても好きだ。

結城が笑うと、悠慈も笑いかけてくれる。

結城はそれがとても嬉しい。結城も悠慈の笑顔が好きだから・・・
笑顔は楽しい。

結城はまた新しいことを覚えた。

これは感情というのだろうか？感情とは少し違うだろうけど、けれども覚えておいて損はない。

悲しいこと以外、覚えておいて特をすることはあっても、損をすることはないのだ。

結城はこれから感情を覚えようとしている。

だけど、結城はもう悲しい感情を知ってしまっている。

ただその感情を自分では理解していないだけで、こういうのは嫌なこと。ただそうとだけ記憶している。

結城はまだ感情の意味を理解しないほうがいいのかもしれない。

それが楽しいものならいいのだけれども・・・

『マタアシタ』

結城はその言葉をそつと口にすると、微笑みながら目を閉じた。
？また明日？

それは結城と悠慈のとても大切な約束。

それはとても安心する言葉。

それはとても・・・結城にとって嬉しい言葉。

昔話

悠慈は少し考えた。

これを聞けば後悔する・・・

これを聞けば、後悔する・・・

だけでも悠慈の出した答えは。

『いいです。例えば後悔したとしても、知りたいから、結城のことが』
『そうか』

老人はやはり。というような顔で笑った。

老人には答えがわかっていたからだろうか。それとただ予想が当たったからだろうか？それはこの人からは読み取れない。

『よかるう。では話すぞ』

悠慈は拳をギュツと握り締め、話を聞く決心をつけた。

それは何百年も昔の話し。

ある洞窟に一人の少女が生まれた。その少女はどこから生まれたのかもわからない。生まれたというよりかは、現れた。とでも言うべきだろうか？そこは不明である。

その少女は洞窟からは一歩も出ようとしなかった。それよりも、まず？動く？ということをしなかった。少女はわからなかったのだ。何処を見渡しても闇。何も見えず、何をしていいのか、何ができるのか？それさえもわからなかった。

何年。いや、もしかしたら何十年。何百年・・・少女はずっと一人だったのかもしれない。ずっと一人で、ずっと何もせずに・・・だが、そんな時に一人の少女がやって来た。その少女はこの洞窟の近くの山に来て、道に迷ったらしい。

そしてその子は少女に話しかけた。

『お話し相手になってくれる？』と・・・

だけど少女は言葉を理解できなかった。そもそも音というものを初めて知った。人というものを初めて見た。だからその少女は何も反応することができなかった。

その子は少女を不気味がり、その洞窟から足早に出て行った。

あくる日にその子はやってきた。何人かの少年達を連れて・・・その少年達もやはり最初は少女に興味を示した。少女は容姿はかなり可愛く、暗いからあまり顔は見えないものの、近づけば人の姿は確認できた。

だが、その少年達も、あの子のように反応を示さない少女を不気

味がった。少年達是不気味がったが、逃げようとは思わなかった。こういうところはやはり男の子だからだろうか？少年達は少女を苛め始めた。

まずは言葉の暴力からだ。普通の人間に言えば傷つくだろう言葉を、何度も、何度も、何度も、少女に向かって言い放った。

それでも反応を示さない少女に、少年達はエスカレートさせ・・・今度は本当に暴力を振るい始めた。さすがにあの子もここまできては可哀想と思ったのか、少女を庇うように止めに入った。だが、少年達はそんな彼女も無視して少女を苛め始めた。

少年は3人もいる。男の子とはいえ、男3人に蹴ったり、殴られたり、少女は普通では痣や、どこから血が出て不思議ではないぐらいに苛められた。

だけでも少女は何の反応も示さなかった。外部には何処からも傷が見られない。さすがにこんな異常なことを見れば少年達も恐怖を覚える。少年達はその場から全力で逃げ出した。

あの子は少女を心配するように少しとどまっていたけれど、やはり少女を不気味がりの子もいなくなってしまうた。

少女は見えないところに傷を負った。

そう、？心？に傷を負ってしまったのだ。少女にとっては初めて会う人間。少女だって表現できなかっただけで、嬉しかったのだろう。それなのに、拒絶され、その上に暴力を振るわれ、何をされているのか、何が起きているのか。少女には状況がわからなかったけれど、嫌だということはわかった。自分の中に嫌なものが染み渡ってくる。気持ち悪いもの。人間は怖いもの。少女はそんな認識をってしまった。

そしてまた何年かが経ったときに、また洞窟に人がやって来た。人は怖いもの。だから人には近づきたくない。人は嫌い。少女はそう思っていた。だからあの人 came 時・・・

今度やってきたのは二十代ぐらいの優しそうなお兄さんだった。だけでも少女に性格などの違いがわかるはずもなく……

その人は少女に興味を示した。なんせこんなところに人がいるのだから。そして話しかけた。

『君はどこから来たの？』

優しい風に、そつと問いかけた。

だけど少女には言葉がわからない。だから違いなんてわからない。音が聞こえる。少女の中でこの音？言葉？は嫌なものだと認識されてしまった。

『うああああ』

少女は叫んだ。何もかもを拒絶するかのように、目の前のものを拒むために。目の前のものを消し去るために……

少女はそのまま何かの力を放ち、その人を……殺めた。

自らの意思で、そして自らの手で、優しいこの人を……

少女が叫んだ後の数秒の時間。その人は少女を怖がることなく心配の言葉をはなっていた。だけでも少女には？言葉？は嫌なものになっていた。だから……それは、少女を追い詰めることにしかなかった。

何という哀れな……

もしも最初に会った人間がこの人だったら？きっと少女は人間を好きになっていただろう。そしてこの人が死ぬことなどなかっただろう。

少し順番を間違えてしまっただけで、最初に会った人間があんなものだったために、少女は人間を嫌いになってしまったんだ。人間の全てを、何もかもを拒むようになってしまったんだ。

『この話して貴様はどう思った？』

『これが、結城……？』

悠慈はその話を信じられなかった。

まさか結城がそんなことをするだなんて、人を殺めてしまったなんて・・・それに、それならばどうして自分には何もなかったのか？悠慈は信じられなかった。

『だって結城は何もしてこなかった』

『では続きを話そう』

悠慈は老人のほうを真剣な目で睨みつけるように見、話しに耳を傾けた。

少女はそれから一人だった。

誰も訪れることなく、いつものように一人だった。一人など少女にとつては普通だ。今まで生まれてからずっと一人だったからだ。

少女はいつものように何もすることなくただじっとしていた。けれど・・・

少女は初めて立った。立つことはできたのだ。その足で少女は洞窟を歩いた。

少女のいる所はそんなに深いところではなかった。少女は自分のいるところから更に深い深いほうへと歩いていった。

奥へ奥へと進んでいくと、暗いところになれた目も、何もうつさなくなってしまうた。見えない目では足場もわからない。少女は壁にもたれながら進んでいった。目的などはない。ただ何かをしたかったただだ。歩きたかったわけでもない。ただ自分も何かができるかが知れたかったただだ。

少女はどんどんどんどん奥へと進んでいった。今頼りなのは触れている壁だけだ。

どんどんどんどん歩いて行った。

歩いていくとだんだん少女は慣れてきたのか？壁を借りずに自らの足だけで歩いて行った。感覚だけで・・・それだけを頼りに・・・

少女はどんどん歩いて行った。どんどん歩いていくと・・・
『あぁっ』

少女は小さな悲鳴をあげ、体勢を崩した。そしてそのまま・・・
地面に倒れ、頭を打ってしまった・・・

『それで・・・どうなったの？』

『知りたいか？』

『うん・・・』

老人は悠慈の目を確かめるかのように見つめた。

『それはお前が一番知ってるであろう』

『僕が？』

老人はそう言うと、悠慈に背を向けた。

悠慈はそれを見て『帰れ』と言っていると思ったのか？悠慈はおとなしく踵を返して、出口へと向かって行った。

夢

結城は夢を見た。

とても、とても嫌な夢を・・・

『ヤダ・・・』

それは結城の昔の出来事だった。あの老人が悠慈に話したそのま
まの出来事。

結城はそれが自分のことなのか？

とても悩んだ・・・自分があんなことをしたのか？あれは本当に自分なのか？と・・・

結城は昔の出来事の夢を見た。

だけど自分がどうやって生まれたのか？自分が何者なのか？自分はなぜここにいるのか？それだけはいくら考えてもわからないでいた。結城はあの時。体勢を崩して頭を打ち、見事なほどに記憶をなくしてしまったのだ。

だから結城は自分があの時人を殺めてしまったこと。自分があの時人間に酷い目にあわされたこと。それらを全て、結城は覚えていないのだ。

自分に記憶があるのは、気づけばここにいて、そして何もせずにただ蹲っているだけで時が過ぎていった。そして初めて会った人間は？悠慈？だ。

それしか結城の頭には記憶されていない。

今夢を見ても、これが本当に自分のしたことなのか？結城はわからなかった。

そもそも結城は夢というものを始めて見た。

だから夢が何なのかもわからない。今の出来事は何だ？どうして頭の中に直接映像が流れてくるんだ？どうして自分があんなことをしているんだ？疑問が結城の中を支配していった。

『アイタイ・・・』

ぬくもりを求めた。

結城は今凄く悠慈に会いたかった。

このどうにもわからないような気持ち。不安になって仕方がない。会いたい。今すぐに・・・

悠慈は老人から聞いた話を思い返していた。

本当にあれが結城がやったのだろうか？ありえない・・・

でもまだ、結城があそこにいる理由や、結城がどうやって生まれたのか、結城は何者なのか？それはきちんと聞かされていない。

今だから思うけど、あの老人は何かを隠している気がする。

何か重要な、何かを・・・

もしかすれば、その何かがわかれば、その何かさえわかればもしかしたら何者なのか、全てが明らかになるのかもしれない。

けどあの人が言ってくれないのだから、それは仕方がないことだ。あの老人はきつと自分が気が向くまでは、口を割らないだろうから。

『結城のところに行ってあげないとな』

悠慈はその疑問を全て振り払って、結城のいる洞窟へと足を向けた。

洞窟に入ると中にはいつものごとく結城が座っていた。
だけど・・・

『何かあったの？』

今日はいつもと何か違う。悠慈は直感的にそう思った。

『あ、あ・・・』

結城は必死に何かを訴えようとした。

結城はまだ悠慈の言葉は理解できてきたが、自分で言葉を話すのはまだあまり無理だった。

『大丈夫だよ。僕がいるから』

悠慈はそう言って微笑んだ。

話しは聞いてあげられない。何を訴えているのかわからない。

だけど、励ましてあげることができる。もしかしたらこの言葉をわからないかもしれない。でも、結城は悠慈が笑いかけると笑顔になる。結城は悠慈の笑顔が好きだから。

『もう大丈夫。だから心配しないで』

悠慈はもう一度そう言うと、結城をそっと抱きしめた。

結城は突然のことで呆然としていたが、それはとても安心できるものだとなり、嬉しそうに結城も悠慈の真似をして、悠慈の背中に腕をまわした。

『えっ・・・』

悠慈は少し照れくさかった。

今自分がしたのは結城を安心させるためにしたものだ。それ以外何も考えていない。けれど、今結城から腕を回してきたことで悠慈はやっと今自分のしたことを理解してしまった。自分は突然女の子に何をしてるんだ。悠慈はそんなことを考えた。

『ごめん・・・』

『アタタカイ』

結城は嬉しそうにそう言った。

その言葉に悠慈は何か照れくさいものを感じた。

今まで結城が？会いたかった？とか？一緒にいたい？などと言っていたのは普通に受け止めていた。結城は今まで一人で一緒にいる楽しさを知ったから。その程度にしか考えていなかった。

だけど今、この言葉を聞くと、何故かさつきから照れくさいものを感じ、同時に頬が熱くなるのを感じた。

どうして今日はこんな風に思ってしまうのだろうか？今までは一度だって結城のことをそういう風に見たことはなかった。ただ・・・でも今思えば、こう思うのが普通だったのかもしれない。

少し変わってはいるが、異性には違いない。

こんなに可愛い女の子に今まで自分は何をしてたんだ？

どうして今ごろなんだ？僕が鈍すぎるのか？それとも・・・

もしかして僕は結城に恋をしまっているのか？
そんなことはないだろう。と、悠慈は自分の中で否定した。

『ごめん。ね・・・』

悠慈は結城から離れると、いつものような笑顔を向けるのではなく。照れくさそうに少しそっぽを向いた。

結城はその悠慈の行動に首をかしげた。

結城にとって初めて見る反応だ。

悠慈はまだ少し赤い頬のまま、いつものように悠慈にパンを差し出した。

『はい・・・』

でもやっぱりいつものように、笑顔で、平常ではいられず・・・
やっぱりそっぽを向いて渡した。

だけど結城は首をかしげるだけで、特には気にしなかった。

『オイシイ』

いつものように、本当に美味しそうに笑顔でパンを頬張るだけだった・・・

悠慈はその笑顔にさえ、少しドキドキしてしまっていた。

やはり悠慈は結城のことが異性として好きなのだろうか？

夢は現実

辺りは暗く、辺りは水に浸されている。何かに繋がれてるようだけれど感覚はない。感覚はなく、自分がここにいいのかさえわからない。

何も感じない、何も聞こえない、何も見えない。自分が生きているのかも疑問に思う。

それは自分を束縛するもの。それは自分を制御するもの。それは自分を・・・

結城はまた夢を見ていた。

何なのか？今のは何なのか？

また自分の記憶にはない。また自分が知らない。だけど、確かに自分だった。そんな映像がまた頭に流れてきた。

今のは何？

結城はまた混乱してきた。

自分は何者？

初めて結城は自分が何者なのか？と、疑問に思い始めた。そして、もしかしてあれば自分が体験したことではないのだろうか？結城はそこまで考えられるようになっていた。

仮定の話し

きっと重要な何かを隠しているに違いない。きっと知っているに違いない何者なのか。そしてどうしてあそこにいるのか。を・・・
自分は自分なりに推測してみよう。どうして老人は隠しがっているのか？悠慈は自分の頭の中で色々な状況を考えてみた・・・

そこは山の奥にある洞窟。ここは入ると生きて帰れないと評判だ。だけど自分が入ってみたかった。ここがどんなものなのか？自分はこういうことを確かめるのが大好きだからだ。

そして男はそこに足を踏み入れた。

その中には何もなかった。

男はそのことにつくりとうな垂れた。

そして帰ってしまおうと足を出口に向かせたその時！

男の傍で何かが光った。何かが強烈な光を放ち、男は目を逸らせた。これは何だ？と思い、男は必死にそれに目をむけようとした。

だがその時！

更に強烈な光を放ち、男はその場に倒れこんだ。

目を覚ますと目の前にはとても可愛らしい少女がいた。

この少女は何だろうか？どこから来たのだろうか？

ふとさっきの光景が脳裏を過ぎった。ひょっとしてこの少女がさっきの光の・・・そう思い男は少女に話しかけた。

『君は何者だ？』と・・・

すると少女は、その時に初めて男に気づいたようにこちらに目を向けた。だけど少女は言葉を発しなかった。ただ男の方を見て、首をかしげるだけだった。

『もしかして喋れないのか。こいつは人間じゃないのか？実に面白いものだ』

男は少女に興味を示し、少女を観察するようにジロジロと見つめた。ジロジロ見ていると、少女はそれを嫌と思ったのか？人間とは思えない。強烈な風圧のような何かを手から発射した。そして男は見事洞窟の外へと吹き飛ばされていった。

だけど、男は諦めなかった。男は毎日のように少女の様子を観察しに行っていた。少女には気づかれないように、ひっそりと観察し、少女のことを調べていた。

こんな感じであの老人は結城のことを知っているのではないかと悠慈は頭の中で考えた。

『でも・・・違うだろ。でも・・・なんかあの人がありえそうだな』

悠慈はそういいながら、少しあの老人のことを違う意味で不気味に思った。

音

パシャッ

パシャッ

これは水を蹴る音。これは人が来たことを現す音。

悠慈が来る時はいつもこの音が聞こえる。だけど今日は・・・

その足音は悠慈のものとは違った。結城は足音で区別できるようになっていた。この音は悠慈ではない。だが悠慈ではなければ誰なのだろうか？悠慈たちのようにここに迷い込んできた者だろうか？結城はいつも以上に体を丸くして蹲った。

あの夢を見たせいだからだろうか？それともただ悠慈以外の人に慣れていないからだろうか？結城は怖かったんだ。人と会うのが、悠慈ではない他の誰かと会うのが、怖いんだ・・・

その足音はなかなか近づいてくることはなかった。遠くからゆっ

くりと、ゆつくりと、聞こえてくるだけだった。

結城は蹲りながら耳だけに意識を集中させていた。

後どれくらいだろうか？今どの辺りにいるのだろうか？結城は耳に意識を集中させてその者の居場所を探っていた。後どれくらいでくるの？結城は凄く？不安？で仕方なかった。

あれからどれくらい経ったのだろうか？結城はまだ蹲って耳に意識を集中させている。まだ音が遠くから聞こえるからだ。最初から変わらず遠くでゆつくりと、ゆつくりと音が聞こえるだけだ。一体何なのか？人ではないのか？人ではなければ何の音なのか？結城は？不安？でたまらなかった。これは何なのか？凄く気になった。だけど・・・その姿を確認する勇気が結城にはなかった。

結城にも？怖い？と思うことだってある。

早くいなくなつてほしい。早く聞こえなくなつてほしい。

今度は意識を集中させていた耳をめいっぱいに塞いだ。もう何も聞きたくない。結城は更にその場に蹲って、更には目を閉じた。

このまま眠つてしまえばいい。このまま何も感じないようになつてしまえばいい。

少女はそう思い、ギュッと目を閉じた。

異変

さてどうしようか・・・悠慈は考えた。

今からあの老人のもとへ行くか？それとも今から結城のもとへ行くか？悠慈は迷っていた。もちろん悠慈が行きたいのは・・・決ま

っている。だけれども、あの老人に聞かなければいけないことがある。

悠慈がそんな風に悩んでいると、ふとある映像が脳裏を過ぎった。それは今日見た夢だ。結城のもとへ不思議な者が近づいて行っていた。確かにそこにおいて、足音も聞こえるのに、その者は全く姿を現さない。そこにいるのにいない・・・不思議な者が結城のもとへ近づいて行っていた。

危険だ。結城が危険だ。それならば・・・やはり結城のところへ行かなければいけない。

そう思って悠慈は結城のいる洞窟へと足を向けた。

結城のいる洞窟。

洞窟はいつもと変わらず音も聞こえず、とても静かだ。

何も起こっていないくて良かった。あれはただの夢だったんだな・・・

そう思いながらも悠慈は結城のもとへと一歩ずつ歩みよって行った。

結城は眠っていた。いつもなら悠慈が来れば必ず起きているのに、必ず起きるはずなのに・・・今日は起きない。というよりは・・・ピクリともしない。

どうしてしまったのか？・・・息はある。・・・だけど、動かない。

一体どうしたと言うのだ？こないだまでは普通に、あんなに・・・あんなに笑っていたのに・・・何があったと言うんだ？

もしかして・・・もしかしてあの夢は正夢だったのか？

確かあのときの夢は最後に結城がギョツと眼を瞑ったところで終

わる。・・・もしかして？そんなはずは・・・だけど、ありえないとも言い切れない。

『結城！結城！僕来たよ。ここにいるよ？ねえ、目開けてよ』

悠慈が叫ぶように一生懸命結城に話しかけても、結城はいつものように笑みを見せてくれない。いつものように・・・

どうして？どうしてこうなってしまったんだ？悠慈は考えた。

だけど、混乱している頭では、きちんと考えることはできなかった。

『あの人に、こういう時こそあの人に聞かなくちゃ！』

悠慈はそう言って走って洞窟を出て行った。あの老人に助けを求めて・・・

不思議な光

暗くて何も見えない。暗くて何も聞こえない。ここはどこだろうか？どうして自分はこんなにも何もない所にいるのだろうか？いつもなら、悠慈が来てくれるのに・・・結城は何もわからなかった。何も感じなかった。

あの映像と似ている。あの時の自分もこんな所にいた。一体ここはどこなのだろうか？どうしてこんな所にいるのだろうか？

記憶があるのは・・・

あの変な足音が聞こえて、それが怖くて目を閉じた。そしたら・・・
いつの間にかこんな所にいた。

どうしていつもの洞窟にいないのだろうか？どうしていつもみたいに悠慈は来てくれないのだろうか？

結城がそんな風に頭を回転させていると、ある一つの光が目に入
った。

暗闇の中にある光は、いつもよりもよりいっそう明るく見え、結
城は目を開けていられなかった。

パシャッ

パシャッ

目を閉じている結城の耳に、またあの足音が聞こえてきた。

一体この足音は誰の者なのか？この光の正体はきつとこの人だろ
う。だけど、この人は一体誰？この人は一体・・・

パシャッ・・・

かなり近くまで音が聞こえた所で足音は聞こえなくなった。

結城は感覚てきに感じた。

この足音の人物は今目の前にいるのだと、だけど光のせいで目が
開けられない。光のせいで誰なのかわからない。この光さえなけれ
ば、光さえ、光さえ・・・

パリン

その時何かが割れる音がした。

そしてその音と同時に光が消えた。

光が消えたことで結城の目は使えるようになった。結城は恐る恐
る目を開けた。今目の前にあの足音の人がいるだろうから。

だけでも・・・

結城が目を開けると、そこは何も変わらない。いつもの洞窟だっ
た。

周りの風景はいつもと変わりなく、そして自分以外は何もない。
・・・ふと手元を見ると、いつもの袋が置かれていた。悠慈が自分
のもとへやってきたんだ。

だけでも・・・悠慈はいない。悠慈の姿が、何処にもない・・・

写真

悠慈は必死に走っていた。必死に、必死に、ひたすら走っていた。そしてようやく古ぼけた建物に着いた。そしていつものように建物の中に足を踏み入れた。

老人がいつもいる場所に悠慈は走って行った。

『聞きたいことがあるんです！』

そう叫びながら・・・

だが、しかし・・・

そこに老人の姿はなかった。

探してみようと足を動かすと、何かを踏んだようだ。それを拾いあげると、それは一枚の写真だった。

最初は何なのか全くわからなかった。

だけど、じっと見ていると・・・

『何なんだ・・・これは、そんなの・・・！』

悠慈は写真を見ると、何処か青ざめた顔をしていた。

そしてその写真を持ったまま走り出した。

そう言うことだったのか。そう言うことだったのか。

だからか。だから知っていたんだ。

悠慈は頭の中で写真のことを整理しながらも、急いで走っていた。

犯人は？

この袋はいつも悠慈が持って来てくれる。

だけど今日は・・・置いて行っていた。

もしかしたら自分が寝ていたからだろうか？自分が寝ていたから悠慈は時間が来てしまっただろうか？結城はそう考えながら袋に手を伸ばした。

袋の中にはいつものように美味しそうなパンが入っていた。

このパンは今や結城の好物になっていた。悠慈は色んな物を持って行くが、これが一番多い。結城の好きな物だから。結城が笑顔で食べる顔が見たいから。とても美味しそうに食べるあの顔が見たいからだ。

結城はそのパンを美味しそうに食べていた。いつもは目の前に悠慈がいるのに・・・今日はいない。だけでも結城はこのパンは悠慈と同じ。そう思いながら食べていた。だから結城は悲しくなかった。パンがあるだけで嬉しかった。

だってこのパンは、悠慈の持ってきた物だから・・・

パシヤッ

パシヤッ

結城の耳に、またあの足音が聞こえて来た。

パシヤッ

パシヤッ

相変わらず向こうの方からゆっくりと、ゆっくりと近づいてくる。

結城は怖いと思った。

だけでも・・・

結城は今度は目を瞑らなかった。それどころか、パンを頬張りながら、足音の方を見つめていた。

きつと結城にとってこのパンがあることで安心できるのだろう。

このパンは悠慈からの物だから。だからこれは悠慈なんだ。

パシャッ

パシャッ

相変わらずその足音は中々近づいて来ない。遠くから、ゆつくりと、ゆつくりと・・・近づいてくる。

早く来ればいいのに、その方がきつと良い。

結城はそう思った。こんなに待たされると逆に・・・逆に怖くなってしまう。

パシャッ

パシャッ

あれから長い時間が経った。ここでようやく相手はこの近くまで来た。

やっとこれが何者なのかわかる。やっとこの足音の正体がわかる。結城は安堵のような物を感じていた。

『結城！』

後もう少しでその者の顔が見えるだろう。そう思った瞬間。悠慈の声が結城の耳に入った。そしてその瞬間に、その足音は止まった。そして今度は悠慈の足音が聞こえる。凄く早い足音。きつと走って来てるのだろう。

そして悠慈は怪しい足音の主のもとへ行くと、その足を止めた。

『やっぱりあなただったんですね』

『ほう。よくわかったな』

悠慈は足音の主・・・あの老人に話しかけていた。

そう、この足音の犯人はあの老人だったのだ。

結城はそんな悠慈と犯人を見つめながら、何かを考えている。特にこの老人の顔を見ながら・・・

『あなたは結城のことをいつからこんな風に見ていたんですか？』

『こんな風？こんな風とはどんな風だ？』

老人は動揺することなく、いつもの冷静な態度で悠慈の質問を質問で返した。相変わらずこの老人は・・・こんな状況にもかかわらず、悠慈よりも何枚も上手だ。

『それでは質問を返します。あなたはここに来たことは？』

『あるぞ』

老人は少し目を逸らして行った。嘘をついているから逸らしたわけではなく。老人が見ているのは結城だった。

結城はずっと老人の顔を見ながら何かを考えていた。

見たことでもあるのだろうか？それともただ何となく見つめてるだけなのだろうか？

『うつ・・・あ』

結城は言葉にできない声をあげた。

だけどこの声は・・・悠慈の耳に届くことはなかった。

『もしかしてこんなことをしませんでしたか？』

悠慈は老人に質問するのにせいっぱいだったからだ。

『こんなこと？』

老人は首を傾げながら悠慈の言おうとしていることに興味を示したのか？老人は少し前のめりになって話を聞いた。

悠慈の話しは自分の夢のことだ。この洞窟に来て、ゆっくり、ゆっくりと足音を立てて現れ、結城を怖がらせた。という話だ・・・

『どうなんですか？』

『そんなに暇ではないぞ』

老人は笑いながら否定した。

まるで馬鹿げている。というように、そして、それに悠慈が疑いの目を向けていると、『ならば証拠はあるのか？』とでも言つてそんな顔を向けてきた。

悠慈はそこで黙り込んでしまった。どうすればいいのか？この写真のことも・・・という風につきつけてやればいいのかわからない。

結城は一人蚊帳の外で、二人の様子を見ていた。

だいたいの言葉は理解できた。

悠慈はあの人が犯人だと思っている。だけどあの人はそれを否定している。

結城は考えた。あの人が犯人なのか？と・・・

何となくあの人が犯人の気もする。だけど自分は足音以外何も聞いていない。

だけど、それならどうして今。あの時と同じように歩いて、現れたのか？それに、同じ足音だった。

だからやっぱり、あの人が犯人のはず・・・結城はそう考えた。

そして、あの人はきつと何処かで見ているはずだ。とも・・・

眞実

この写真をどうやって聞きだしてやろうか？悠慈は考えた。
そうだな……。そうだ！悠慈は思いついた。そして、行動に、
移した！

『この写真が証拠です。この写真にはあなたらしき人と、こんな所
に入っている結城が写っています』

『それがわしだと言う証拠は？それにそれと、今のとどいう繋がり
があるのだ？』

悠慈は質問されて答えに困った。

それを聞かれるとは思っていなかったからだ。

『そんなこともわからずにそんな写真をつきだされてもな……。』

そう言っている老人は、明らかにその写真に視線がいつている。

ここに写ってるのがこの老人だというのはどうやら間違っていないか
つたらしい。

『それではまずその写真のことを聞きます。それはあなたですよね
？』

悠慈は率直に尋ねた。この人には遠まわしに言つと、さらにこの
人に話しを遠くされ、あちらのペースになってしまふからだ。

『証拠はあるのか？』

老人は視線は写真に向いているも、動揺一つせず、全くボロを出
さない。

『どう見てもこれはあなたです。それに、どうしてさっきからこの
写真にばかり視線がむいてるのですか？』

悠慈がそう言つと、ばれてると思つてなかったのか。少し老人
は驚いているようだ。少し目がこちらを睨み付けた気がした。

『ほう。ならば仮にこれがわしだとして。ではこれと何の関係があ
るのか。教えてもらおうか？』

老人はやはり強気だ。危なくなつたところでさりげなく話題を変
えた。それも自分が答えなくていいように……

『それでは僕の仮定の話を聞いてください』

悠慈は負けじとわけを説明する。

昔男は研究にはまっっており、ある研究で生き物を作ること成功した。

その生き物とは・・・

人間の姿形をしており、覚えさせれば人間の言葉だって喋れる。だが、人間ではない。常人離れした力を持っているが、外見はただの少女にしか見えず、これは面白い。と思い、男は少女を表に連れ出そうとした。

だが、その前にはまず言葉を覚えさせなくてはならない。

男は少女をカプセルから出した。すると！

その瞬間少女は目を覚まし、すさまじい光を放ち逃亡した。

男は少女を追いかけようとしたけれども、少女の足は速く。男は少女を見失ってしまった。

男は少女を搜索した。役2日ほど・・・だが少女は何処にもいなかった。

そしていくらか月日が経ち、ある山の近くにある洞窟にいたという情報を手に入れた。男はその情報を頼りに少女のもとへと行った。すると！そこには少女と数人の子供たちがいて、少女が苛められていた。

初め男は少女を助けにしようとしたが、男は少女が反応を示さないことを不思議に思いながら観察していた。洞窟の外で・・・

そしてその時に行っても良かったのだが、また今回のように人が来ると、少女の何かしらの能力が見れるかもしれない。そう思った男は、洞窟の横にテントをはり、見張っていた。

そして、男が思った通り、また人がやって来た。
男はその人の後を追ひ、中の様子を観察した。
すると・・・

男の期待通りに少女は能力を見せ、その人物を殺めてしまった。
男はそれに感激し、ここにいれば更に能力が見れるだろう。そう
思った男は、テントにいることを止めなかった。

男は毎日少女の起きる時間に洞窟を覗いていた。

ある日男が洞窟を覗くと、しばらく蹲ったままだった少女が歩き
だした。

男は気づかれないように、足音を立てないように少女を後からつ
けた。

しばらく、しばらく歩くと、中はどんどん暗くなり、何も見えな
くなってきた。懐中電灯は持っているが、光を照らせば少女が気づ
いてしまう。男は何とか足音で少女の位置をつかんでいた。
すると・・・

少女は足を滑らせたのか？転んでしまい。地面に頭を打ったよう
な音が聞こえた。

男は少し戸惑った。もしかして頭を打って死んでしまったのか？
そう思った。が・・・男は考えた。あの時だって痛さを感じていな
かっただろうし。血だって流れてこなかった。それならば死ぬこと
はないだろう。と・・・

そして男は少女をまた元の場所に戻すと、テントに戻った。こう

しておけばテントにいて、外に出ればすぐに少女の姿が確認できる。

そして長い年月が経ち、少女は目を覚ました。

男は老人とも呼べるほどになっており、そこまですべても少女のことを観察した。

少女はキョトンとしていた。少女は周りをキョロキョロしていた。それを見た老人は、もしかしてこの少女は記憶喪失になってしまったのだろうか？そう考えた。

老人は家に戻った。洞窟での少女が確認出来る位置にカメラと盗聴器をしかけ・・・そして老人は家の中でずっと少女の姿を確認していた。

するとある日、少年が現れた。

その少年は少女を怖がるもなく、毎日かかさずに来ていた。

『こんな感じであなたは知っているのではないだろうか？と僕は思います』

悠慈は真剣に老人に言った。間違っけていても知らない。自分の意見はこれなんだ。と言うように、迷いもなく・・・

『中々良い想像力だな』

そう言って老人は笑っていた。

だが、いつものように自信に満ち溢れた笑みではなく、少し顔がひきつっていた。

悠慈は思った。もしかして自分の仮定の話しは当たっていたのだろうか？と・・・

『そうですよね』

悠慈は迷うことなく、どんどん老人をおいつめていくように言
った。

『・・・そう、だとすれば？そうだとして、今の犯人はわしだとい
うのは？』

老人はまた話をさりげなく逸らした。そしてまたもや自分が答
えなくていいように・・・

『そうだとしても？それでは認めるということですか？』

だが、今度は悠慈は老人を逃さなかった。

それよりか、更に老人を追い詰めた。

こうなってしまうば、さすがに老人も逃げられないのではないか
？悠慈はそう思っ、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

だが・・・

『ああ、そうだ！全ては貴様の言う通りだ！そして今の犯人もわし
だ！』

老人は興奮して、そのまま悠慈を出口の方へと引きずっていった。
『何するんですか！離してください！』

悠慈が必死に抵抗するも、老人の力は強く、悠慈をいとも簡単に
引っ張って行く。

結城はその姿を、ただ呆然と見つめていた・・・

理解

悠慈は老人に長い長い、物語のような説明を老人にしていた。結
城はところどころしかわからなかったが、何となくわかった。

まず重要な、悠慈の話してる少女が自分だということはわかった。

そして、老人が自分と何か関係があると言うことだけはわかった。老人に作られたとか、そう言うことはわからなかった。だが、自分の夢の話が出てきて結城は驚いた。あれはやっぱり自分だったのだな。と、結城は思った。そう思いながらも、自分は何者なのか？ずっと考えていた。そして、あのカプセルに入っていた話しも出てきた。これをつなげると、話しはどうなるのだろうか？

結城が考えていると、いきなり怒鳴るような声が聞こえてきた。それはあの老人のもので、どうやら悠慈に言ってるらしい。怒鳴った後で、老人は悠慈を引きずりながら、洞窟の出口へと行ってしまった。

いきなりのことの意味がわからず、結城はただじっと見ているしか出来なかった。

絶望

『何するつもりですか？僕を殺して証拠隠滅ですか？』

悠慈の質問に老人は答えなかった。いつも冷静な老人も、今度はかなりかなり興奮した様子でいる。

悠慈は自分の身の危険を感じているにも関わらず、怖がってはいなかった。

『僕を殺しても何の解決にもなりませんよ。それよりあなたに罪が重なります』

悠慈は相手を止めさせるように攻めていった。もしかするとこの

策があるから悠慈は怖がらないのだろうか？

『あなたの一番の罪は結城を作ってしまったことです。結城には罪はありません。作ったあなたが悪いのです』

悠慈は老人が答えないのもおかまえなしに話し続けた。

そして洞窟の外へ出ると、老人は悠慈を洞窟の壁に押さえつけた。『わしに罪があると？研究をしたら悪いのかね？わしはただ研究をし、実験をただけじゃ。それが悪いと言ふのなら、わしの趣味こそが罪というのか？』

老人は何故か、何処か悲しそうな様子で悠慈を攻める。というよりは悠慈に縋っていた。

『・・・そういうことじゃ・・・ないです・・・』

悠慈は老人のそんな表情に言葉を失ってしまった。もつと何か言葉を考えていたはずなのに、もつと老人を攻めてやろうと思っていたのに、結城のことでもつと色々言っただけだったのに・・・どうしてか。言葉が出なかった・・・

『あなたは・・・どうして結城を作ったのですか？』

かろうじて口から出た言葉は今まで全く考えたこともないようなことだった。言っただけで悠慈自身も、どうして自分がこんなことを言っただけかわからなかった。

老人は俯いていたのを、悠慈の以外な質問により顔をあげた。

『どうして・・・だと？』

老人はらしくもなくキョトンとした顔をしていた。

まるで、何故そんなことを聞くのだ？とも言っているかのよう・・・

『ええ。どうしてですか？』

自分が聞いたんだ。ここまでくれば聞くしかない。責任を持って・・・

『そうだな・・・』

老人はそう呟くと、何かを考えるような顔になった。何かを考える。というよりは・・・何かを思い出す。って言ったほうがいいだろうか？老人はその時のことを思い出している・・・

『わしは・・・』

昔男には温かい家族があった。妻がいて、子もいて、その家族は何処よりも幸せだと思っていた。

事実、その男は幸せだった。毎日仕事から帰ると、妻が飯を作って待っていて、甘える子供が待っている。そんな幸せな日々が続いていた。

男は実験が好きだった。免許は持つておらず、趣味で実験をするしかなかったが、仕事には困っておらず、男は趣味の範囲で実験をしたりしていた。

だが、その趣味での実験の結果は、色々な博士の目に留まるものだった。男はとても有能だったのだ。

そしてある日・・・

男の実験データを奪おうと試みた者がいた。その者は男の家に侵入した。男の実験室のような部屋は、家の屋根裏部屋にあったのだ。その情報を聞きつけたらしく、その者たちは実験室に入るためにやってきた。

その時はちょうど男は留守だった。屋根裏部屋には簡単に侵入することができ、その者たちは実験データを奪った。

だが、そこで帰れば良かったものの・・・男たちは目の前の男の実験のものに、かなりの興味を持ち、その者たちはそれを奪おうと

した。だが・・・

その物はとても危険な物であり、扱いには十分に気をつけなければならなかったのだ。その者たちはそんなことは知らなかったのだ。そして、そのせいで・・・

家は全焼だった。屋根裏部屋の全てはもちろん。家の部屋も全て。そして、妻や、子も・・・何もかもが灰とかし、一瞬で男から？幸せ？全てを奪ってしまったのだ。

『わしはただ、実験をしたかっただけじゃ。それなのに、どうしてわしがこんな目に合わなくてはならないのだ？』

老人は今にも泣きそうな目で悠慈に縋っていた。

悠慈は初めてみる老人の悲しげな表情。初めて聞く老人の悲しい昔話。

そんなことを一気に聞かされてしまったのは、悠慈も老人に同情するどころか、自分までもが胸が痛んでくる思いになっていた。

自分はこの人のことを何も知らなかった。自分は自分と結城のことしか考えていなかった。

悠慈は老人に罪悪感を感じてしまった。どうして自分は・・・『わしに同情しておるのか？』

老人は自分を嘲笑うかのような乾いた笑みを零した。

悠慈にはそれが、自分はこんなにも悲しい人間だったのに、今までこんなにも強がっていた自分が・・・なんだかよくはわからないけど、どういう風に表現すればいいのかはわからないけど、老人の気持ち、悲しい気持ちが凄く伝わってくる・・・

『そういう人間もおったな・・・』

老人はまた何かを思い出すような顔になり、その話しの続きを語った。

男は絶望に落ちた。今まで家族が自分の幸せだったのに、今まで家族が自分の全てだったのに、それをとられては……男は絶望に落ちるしかなかった。

どうしてこんな状況になったのか？男は全くわからなかった。原因なんて知らなかった。知りたくもなかった……

男は何度も自殺しようと考えた。何度も、何度も……だが後少しのところでいつもとどまってしまふ。家族のいない自分にこの世に未練などないのに……男はそれでもやはり死ぬことに恐怖はあった。

だが、ある日。ある男の一言で、男は生きる希望を取り戻したのだ。

その者は男の会社の部長だった。穏和な人で、部下からかなりの信頼を得ていた。甘いところもあり、上の者に目を付けられたりしていたが、だが部長はそんなことなど気にしなかった。

『君には家族はいなくなっただかもしれない。だが、君には家族以外に好きな物があるじゃないか。君には研究という趣味があるだろう？』

部長のその一言で、絶望に落ちていた男に希望を与えた。自分にはまだ生きがいがある。自分にはまだ生きている意味があ

る。この世には未練はたっぷりあった。自分は博士になるのだと、それは希望でもあり、野望でもあった。男はその野望を果たすことを生きがいにし……

『わしの生きがいは研究や実験をしていくことじゃ。そして、博士になることが、わしの野望じゃった……』

『その願いは叶ったのですか？』

悠慈はそつと老人に伺った。

そこまで丁寧に言うほど、悠慈は今の老人にかなり同情をしている。

『その願いは……叶わなかった』

老人は今まで以上に悲しい顔をして、そつと呟くように吐き捨てた。

悠慈はその理由を聞いていいのかどうか。しばらく悩んだ。

だが……

『あの人は、わしのことを評価してくださった。じゃが……』

部長は男を博士に推薦した。

男はそれほどまでに才能があつたのだ。

だが……

男の家が全焼した原因を知っている者がいた。

そいつは男の実験データを盗むことを計画していたことを知っている者だった。その者は頭が冴えており、発火の原因をなんなく想像出来たのだ。

そしてその者は、自分の仲間のことは言わずに、男の実験での物が発火の原因だということだけを伝えた。

上の物はその情報を聞き、男を博士にすることを拒否した。

男はそのことにより更に絶望に落ちた。

博士になることを野望に生きてきたのに、その野望は果たされなかった。

しかも、実力がなくてなれなかったわけではなく。嘘の事実のせいである。

男は今度こそ自殺してしまおうと思った。

もう、もうこれで死んでもかまわないのではないか？

自分が死んでも悲しむ者はいない。

だけでも、そんな時にもまた、彼が男を救ってくれたのだ。

部長は男に大きな家を与えた。

これに一体何の意味があるのか？

部長は男に自分の地位を与えた。

一体何故ここまでもするのか？

男はその時何も考えられず、ただ部長がすることに、部長がしてくれることを黙って見ていた。

そして男は何も考えず、部長として働き、大きな家ではきちんとした研究室を作り、研究を続けていた。

そして男がそんな生活をして、一ヶ月が経った時。

男もその傷が癒えたのか？

男は前より物事を考えることになった。

そして疑問に思った・・・

どうして自分は今部長なのか？
あの人は何処へ行ってしまったのか？

男が事実を聞いたのは三カ月後の話だった。

部長は何があつたのかは知らないが、生きる希望をなくしていた。
それは男が希望をなくす前からだった。

部長は男の姿に自分を重ね、最後の自分の仕事を果たしたら、死のうと考えた。

その最後の仕事とは、自分と似ている男を救うことだった。

自分にはもう生きる希望はない。だけど、生きる希望を与えることは出来る。

だから部長は男に全てを捧げたのだ。

大きな家は部長の家で、部長の地位は部長の物で・・・

部長は自分の持つ物全てを男に捧げ、死んだのだ・・・

男は後悔した。

どうして自分は気づけなかったのか？

どうして自分は自分と同じ状況の者に縋ってしまったのか？

どうして・・・

どうして自分だけでもあの人の心の闇に気づけなかったのか？

そう思うと男は悔しく、悲しく、無力だと感じた。

こんな自分は生きていてももうダメだ。男はそう思った・・・

男は自殺しようとビルへ上った。
だが・・・

身を投げようとしたその時に、部長の顔が頭を過ぎった。

部長もこんな風に死んでしまったのか？

それに・・・部長は最後に自分を幸せにして死んでいったんだ。もし自分がここで死んでしまえば、部長の最後の仕事を果たさないことになってしまう。それでは部長の今までの自分への優しさは消えてしまう。

あの家も、今の地位も・・・

それならば・・・

男は部長の願いを生きがい、生きることを決意した。

『わしが今ここに在るのはあの方のおかげなんじゃ・・・』

悠慈はその話を聞くと、何だか凄く悲しくて、何だか自分までもが情けなくなってくる。

『なら、あなたが結城を作ったのは・・・寂しかったからなのですか？一人が寂しかったからなのですか？』

悠慈が本来の質問をすると、老人は苦笑いのようなものを浮かべ、その時のことを懐かしみながら呟いた。

『いつかあの方が言っておられたのだ。一番不思議なのは人間だと博士なら不思議なものを作りたいと思わないか？と・・・だからわしはそれを実現させようとしたのじゃ』

悠慈はその話を聞くと、もう最初のように結城を作ったことの怒りなどなくなってしまうた。

怒りどころか、老人のその人への尊敬の念が伝わってくる。

『あなたは・・・』

『証拠を隠滅すればいくらでも書き換えることができるのだな・・・』

老人は確かめるようにそう呟いた。

悠慈は何を言っているのかわからなかった。それがどうしたと言

うのか？全く意味がわからなかった。

『そうじゃ！証拠を隠滅してしまえば』

老人は話したことで落ち着いたと思っていたのが、またさっきのように興奮した。

昔の怒りが出てきてしまったのだろうか？

だけでも悠慈はそのことの意味がわからなかった。

きつとさっきの話で老人に同情したから、そのせいだろう．．

『だからお前は死んでしまえ！』

老人がそう叫んだ瞬間。

悠慈は自分がさっきまで置かれていた状況を思い出した。

だが、それも遅く．．．

壁から反転させられ、山の崖へと、突き落とされてしまった。

老人の顔が、悲しげな顔をしてた気がした．．．

悠慈

悠慈が老人に連れられ、話を聞いていた時。

結城は自分はどうすればいいのかわからなかった。

向こうでは老人と悠慈の声が聞こえる。

自分が行った方がいいのだろうか？

結城はそんなことを考えていた。そもそも何の話をしているのだろうか？結城には会話は途切れ途切れに聞こえるが、まだあまり言葉を覚えていないので、ところどころしかわからなかった。

それでもさっきのように叫んだりしていないし．．．

結城はそう思いながら洞窟にいた。

が・・・

何故か急に悠慈が危ない気がしてきた。

何故かはわからないけど、勘というのか？ただなんとなく嫌な予感がしたのだ。

結城は自分の勘を頼りに、悠慈の元へと向かった。

その予想はどうやら当たっていたらしく。

悠慈は老人の手に寄って、崖の下へと・・・落とされてしまった。いくら結城でも、ここから落とされるのは危ないということぐらいいは知っていた。

悠慈が落とされた。

悠慈が、殺された・・・

結城は何故かこういうことは理解できていた。

悠慈が・・・

結城は悠慈がいなくなってしまった。

そう思うと、自分の思いをとめられなくなってしまう・・・

『結城。という名前をつけてもらったのだな・・・お前だけでも幸せになれて良かったよ。本当は研究をするために作ったのではないよ。君は、わしの子供だ・・・』

老人の言葉も、すでに結城の耳には届いていなかった。

結城は今悠慈のことについてはいだから・・・
だけでも・・・

『あつ、ああ・・・』

結城は老人のことを思い出したらしい。

顔を見たのもほんの一瞬ほど、それに何十年も前だ。

しかも、結城は記憶をなくしているはずなのに・・・
記憶が戻った？

ということとは・・・

『そうか。わしがわかるのか・・・記憶がわかったのじゃない』

『ニンゲンハキライ』

結城はあのときのことを思い出したのか？そうつぶやくと、あの時のように、老人を・・・

『お前に遣られるのなら、わしもほんもうだ』

最後にそう言い残し、老人は、結城の手によって・・・消えた。

結城はそのまま悠慈の元へと駆け寄った。

悠慈は傷だらけで、意識を手放していた。

このまま放っておけば、確実に死んでしまうだろう・・・

だけでも、結城が救急車などと呼べるはずがない。結城はどうすればいいのかわかるのだろうか？

『う・・・ユウ、ジ・・・』

結城はここで初めて悠慈の名前を呼んだ。

今まで呼ぶことが出来なかったのに・・・

『ユウ、ジ・・・』

結城はもう一度その名を口にした。

そして・・・

結城は悠慈の上に手をかざした。

すると・・・

悠慈は光のような何かに包まれ、結城の放つその光によって、傷が段々癒えていった・・・

『ユウ、ジ・・・』

結城はもう一度その名を口にした。

すると・・・

『ゆう、き？』

悠慈がとうとう目を覚ました。

結城の力によって、悠慈は意識を取り戻したのだ。そして傷も癒え、悠慈は何事もなかったかのようになっていた。

『結城・・・僕は？』

悠慈は自分がどうなったのか。理解出来ていなかった・・・

記憶・・・

悠慈が目を覚ますと、結城が目の前にいた。

悠慈は自分がどうなってしまったのか。それを必死に思い出した。老人の話を聞き、老人が・・・

そうか。

悠慈は老人に崖から落とされ、殺されかけたことを思い出した。でも、それならば、何故？何故今自分はこんなにも元気なのか。

何故自分は何処も怪我をしていないのか・・・

悠慈は疑問に思いながら、何となくは想像がついていた。

もしかして・・・

その視線の先には結城がいた。

もしかしたら、いや、きっと彼女が自分を助けてくれたのだろう。結城に凄い力があることは、話して聞いてわかった。

だから、人を生き返らす力があつたとしても、おかしくはないだろう。

『結城、ありがとう』

悠慈はそう言うと、結城の頭を撫でた。

結城はとても嬉しそうな顔をして、頭を撫でられていた。

ところで老人はどうしてしまったのだろうか？

悠慈は結城を見ながら思った。

あの後そのまま逃げ出したのだろうか？

証拠を隠滅できたと思って・・・

悠慈が上を見ながらそう考えていると、結城がニヤニヤしながら悠慈の顔を見ていた。悠慈はそれが不思議で、何処か不気味に思えて・・・

そして、何か嫌な予感がした。

だけでも・・・

悠慈は結城に恐る恐る尋ねた。

『ねえ、結城。あの人は何処へ行ったの？』

悠慈がそう聞いた瞬間。

結城はさつきよりも笑みを深くした。

悠慈はそんな結城に恐怖した。

今までこんな結城を見たことがあるだろうか？

いや、少なくとも悠慈は見たことがない。

『コロシタノ』

結城はその顔のままそう答えた。

悠慈はその瞬間背中にとてつもない寒気が襲った。

結城が人を殺してしまった・・・

ということは、もしかしてあの出来事を思い出してしまったのだろうか？でなければ、この前までの結城にそんな力があるわけがない。

だけでも・・・もし思い出していなくても、とっさに能力を使っただけでも考えられる。

『ユウジ・・・アノネ』

結城が悠慈の名を口にした。

悠慈はさっきは名前を口にしたのを聞いていなかった。なので、今初めて名前を呼ばれたと思って、それは嬉しかった。

けれど・・・

この状況ではいつものようには喜べない。

『アノネ・・・ニンゲンキライ』

結城ははつきりとそう口にした。

そうあの時のことを思い出してしまったのだ。

あの時のことを思い出し、人間が怖くなり、老人を殺めてしまった・・・

ならば、どうして自分は生き返らせてくれたのか？

人間が嫌いならば、自分のことも殺しているはず・・・

悠慈はそう疑問に思いながら、結城がまた何かを言おうとしていることに耳を傾けた。

『デモ、ユウジハスキ・・・ナノ』

結城はそう言うのと、いつものような優しい笑顔になった。

『結城・・・』

悠慈は嬉しいが、何処か複雑な気持ちでいた。

昔のことを思い出してよかったのか？

思い出さなければあの人は死なずに済んだのか？

どうしても悠慈はそんなことを考えてしまう・・・

そして二人は洞窟へと戻った。

しばらくお互い無言でいると、悠慈はあることを思い出した。

『結城・・・そういえばさっき外出してたよな？目・・・は？』

『あっ・・・』

結城はだいぶ言葉をわかってくれたらしく、たいていのことは二

人で会話できる。

『それならさ……』

悠慈は手を差し出した。

初めて結城と会った日に悠慈は結城を外に連れていこうとした。

だけでも……結城は目が慣れてなく、光を受け止められなかった。だけど、今ならばどうだ？

さつきは間違いなく外に出た。

ならば……

『結城、僕と一緒に外に行こう』

『えっ……』

結城は悠慈の言葉に驚いた。

けれど、すぐさまその顔は笑顔に変わった。結城は外に出てみた
いと思っていたのだろう。

街へ

『これが外だよ』

悠慈は自分の地元の町まで結城を連れて来た。

結城は今まで見たことのない風景に驚いた様子でいた。戸惑っている姿がどうにも可愛く、悠慈はそれを見ているのが楽しかった。

『ユウ、ジ……』

結城は悠慈の袖をひっぱりながら、止まっている悠慈を誘導した。

結城は悠慈よりも楽しんでいたのだ。

初めての外の風景……

初めての悠慈との散歩・・・
その現実が結城にとってはとても嬉しいものだったんだ。

しばらく歩いていると、結城が悠慈の袖を強くひっぱりだした。
初め悠慈はさっきのようにただはしゃいでるだけと思っていたが、
それにしてもどうにも結城の様子がおかしいと思い、悠慈は結城を
心配した。

『どうしたの？結城・・・？』

結城の顔を見ると、結城は何処かを見つめながら、怯えているよ
うだった。

『結城？』

悠慈は結城の目線を追う。と・・・

そこには人がいた。

そうか。結城は人が怖いのか・・・結城は人が怖いから・・・町
に連れて来たのは失敗だったか？

『結城、走る！』

悠慈は結城を連れて人のいない所まで走って行った。

『結城、もう大丈夫だよ』

悠慈は結城を宥めた。

だけでも結城は全く納まらなかった。まだ怯えており、焦点の会
っていない目で、何処か遠くを見つめていた。

そんなにも人間が怖いのだろうか？自分は何もないのに・・・

悠慈はそう考えながら、疑問に思った。

どうして自分だけは特別なのだろうか？

普通なら記憶を取り戻した瞬間。自分のことだって怯えたはずだ・

・
自分のことだつて殺そうとしたはずだ・・・
なのに・・・どうして？

悠慈は結城を心配しながらも、そんな疑問に取り付かれていた。

『結城？結城！』

いつまでも怯えている結城の顔を、悠慈は見ていることが出来なかった。

『結城・・・大丈夫だから・・・』

悠慈はそう言つて結城を強く、優しく抱きしめた。

さっきまでの笑顔な結城に戻つてほしい。

もう、あんな疑問なんて関係ない。自分だけが頼られているのなら、自分が何とかしなければ・・・自分だけが結城の力になれるのだから・・・

『お願い結城。さっきのように笑顔になって、いつもみたいに笑つて・・・』

悠慈は懸命に結城に話しかけた。

早く元に戻つてほしい。その一身で・・・

『コワイノ・・・ヤ・・・ニンゲン、クライ・・・ナノ・・・』

だけでも結城はいつものようには戻つてくれない。

ずっと怯えながら、うわ言のように呟いている。

どうすれば・・・どうすれば元に戻るのか？

しばらくずっと、ただ強く思いながら、結城を抱きしめていたけど、一向に戻る気配がなかった。

どうすればいつものように元に戻ってくれるの・・・

悠慈は結城と過ごした短い日々を思い出していた。

最初に会ったのはただの偶然だ。

少し山を散歩していたらたまたま洞窟を見つけただけ、それで面白くて洞窟の中に入ったら、結城がいた。

最初は色々ビックリしたけど、別に怖くもなかったし、結城のことを違う目でなんて見なかった。

時々結城が何者なのか・・・ちよつと疑問に思つて、少し怖くなったりもしたけど・・・でも、それでも結城を軽蔑なんてしなかった。

自分は今でも結城が好きだ。

今なら結城にはつきり言えるのに・・・今なら・・・

結城は人間じゃない。結城は老人に作られた不思議な生物だ。

そんなことはもう知っている。

結城は人間じゃないことも、結城が危険なことも、結城が人を殺めてしまった犯罪行為をしたことも、全て知っている。

結城のダメなところは、全て知っている。

だけど・・・

それと同じ位に、結城の優しいところや、結城の素敵な笑顔や、結城は純粹で寂しがりやな性格つてことも全て知っている。

自分は誰よりも、結城のことを知っているんだ。

だから・・・

『結城！お願いだ！僕のためにもう一度笑つてくれ！』

悠慈は今までにないくらいに声を張り上げて結城に叫んだ。

結城に目を覚まして欲しい。その一心で・・・

『ユウ・・・ジ・・・』

結城はいつもの結城に、目を覚ましたのだ。

『結城！僕がわかる？ちゃんとわかる？』

『うん・・・』

結城は悠慈の顔を見ながら笑いかけた。

悠慈の言った通りに、悠慈の望み通りに、結城は飛びっきりの笑顔で笑いかけた。

その後

あれから結城はいつもの様になりなく日々を過ごしていた。

悠慈は毎日のように洞窟に行き、結城との楽しい日々を過ごしていた。

結城はあれから洞窟から出ることはなかった。人と会うとまた前のように、もしくはそれ以上のことになってしまいかもしれないからだ。

結城は今や、もう普通の人間と変わらないほどに、言葉を話せるようになっていた。

今では悠慈との世間話しは毎日、悠慈はよく学校の話しをしていた。

結城は学校に良い印象を受けたく、学校を凄く気に入っており、毎日悠慈からの学校の話しを楽しみにしている。

さすがに人間が何十人といえるところに結城を入れるわけにもいかず。本人も行くのは嫌だと言っている、連れて行くようなことはしないが・・・

それでも結城だっけいつかは学校に行きたいと思うはず、いつかは女の子の友達を作って、ショッピングや何かをしたいはず・・・

だけど、それはまだ結城には早い。

今はとにかく人間に似た生活することを頑張らなければいけない。

最近は洞窟に時計を置いている。睡眠時間や、悠慈の置いていく食事の時間。そして、悠慈がこの洞窟にやって来る時間をわかるために・・・

今はまだ針の位置で教えているが、いずれ時計の読み方をきちんと教えようと思う。

そして人間らしく、ある程度の勉強は教えておこうと思う。

これから結城は悠慈のいない間も暇を持て余さないようになるだろう。

今は結城の中で時計がマイブームになっていたりする。

そして、洞窟の外には、悠慈の書いた文字で、看板に『ここには入らないください』という注意書きをしている。

なので、今やここに間違えても入ったりする人はいなくなった。

これで、結城も悠慈も心配することはなくなったのだ。

もしも結城が普通の子なら・・・

『悠慈。悠慈』

『どうしたの？結城』

『今度一緒に買い物に行つて欲しいの』

『えっ、うん・・・わかった・・・』

笑顔を武器にして、悠慈のことを上手い具合に使っていただろう。そして、周りには子悪魔のような笑顔を振りまき、男共を虜にしていたに違いない。

だけでも・・・

『悠慈はあたしから離れちゃダメだよ』

結城の本命は悠慈であつた・・・

そして、悠慈もまた結城のことが大好きで、二人は毎日ラブラブなのだ・・・

と、きつとこんな風に二人はやっていってゐるだろう・・・と、悠慈は少し想像したりしているのだった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5703p/>

不思議な少女と僕と

2010年12月19日00時55分発行